

半 丈 記

永井 規男

「過ぎたるは猶お及ばざるがごとし」とは孔子の言である。このごろあまり聞かなくなったけれども。しかし、近ごろの機器類の発達具合を見るにつけ、この言を思い浮かぶことが多くなった。たったふた昔前、こんなのがあれば便利でよいと思われていたことが、今では実際に機器となって出現し、当たり前につかわれている。実現不可能かといわれていた日本語のタイプライターも、ワープロなるものが現れて当然の代物となり、それすらうっかりすると時代遅れのものになりかねない有様である。相手の顔を見ながらの電話も、夢物語みたいなものであったが、それも実現化してしまった。そのうち裸のまんまで電話なんてことはできなくなって、電話するときは正装するということになって、行儀作法が良くなるかもしれない。こうして電子機器類が発達して思いのほかの便利さを享受できるようになったのは大いに結構なことだけれど、その便利さについていけなくなる自分を顧みて、ときに‘ん’と思ってしまうのである。要するにお前さんが歳を取ったということさ、といわれるに決まっているが。しかしである、これで本当に便利になったのかと思うのである。最近、某作家の短編を読んで笑ってしまった。親孝行のつもりで新築した家を息子から与えられた、独り暮らしの年寄りの母親の話である。最新の電子機器類で装備された新築の家に住んだ、というより住まわせられた母親がどうなったか。餓え死に、凍え死にしかけたのである。ご飯を炊こうにも、風呂を沸かそうにも、暖房器を動かそうにも、すべてこ難しくボタンを押していかなければならない。ボタンを押して出てきた画面が何なのかがそもそも分からない。だから次にどうすればよいのか分かりようがない。緊急の場合にとて与えた携帯電話も使えない。だいたい携帯電話のボタンは小さくて良く見えない。結局、なにひとつ作動できなかったというのである。

いやまったくこの母親に同感しましたね。同感したからこそ笑ったわけ。だって私自身がこの母親の領域に近づいていることを感じるのだから。昨夏も、風呂のモニターが故障して取り替えたら方式が一変して、とたんに義母が風呂が使えなくなってしまったのである。これしきのことがと作る方は云うかもしれないが、そんなことすら分からないのが老人というもの。恥をしのんでいうと、わたしだっていまや車のラジオを聞くことができない。いったい運転中にモニターを見ながらいろいろ操作してどうやって選局せいというのか。画面に目を凝らしていようものなら事故を起こしかねないではないか。プッシュ・ボタン方式で限られた局数でもよいから簡単に選局できる以前の方式のほうがよほど安全かつ便利ではないか。そんなことを独りで毒づきながら運転している。機器が内包する機能が増えることと、便利ということは全く別の問題である。作る側はせっせと機能アップに熱中してしまって、「過ぎたる」状態になってしまっているのに気付かないのではないか。ちかぢか老若男女すべてがITやその他の電子機器をつかわさせられる時がくるだろうが、いまのような有様では機器の製作者は確実に指弾をうけるに違いない。目の不自由な人、手が不自由な人、頭が不自由な人（小生なんか全部該当しそうだ）が、容易にきちんと使いこなせるものこそが本当の便利というものであることを認識してもらいたいものだ。今回は閉「孔」子になっていささか苦言を呈した次第。拙い落ちで閉口されたかも。